

讚仏乗の人々

——インド仏教詩人と妙好人——

目次

はじめに

一、マートリチエータの詩

二、シャーンティデーヴァの詩

三、浅原才市の歌

四、『無量壽經』第十七・十八願成就の文

五、諸經典における「人身得難し」の文

(一) 『ダンマパダ』系の「人身得難し」の文

(二) 『ダンマパダ』系以外の諸經典における「人身得難し」の文

(1) 譬喩なしの「人身得難し」の文

(2) 盲亀浮木の譬喩のある「人身得難し」の文

(3) 優曇花の譬喩のある「人身得難し」の文

(4) 盲亀浮木と優曇花の二つの譬喩のある「人身得難し」の文

おわりに

はじめに

讚仏乗の人々

「讚仏乗」という言葉は、『法華經』・『方便品』に見出されるが、『白氏文集』において、

畝部 俊英

我有三本願。願以今生世俗文字之業、狂言綺語之過、転為将来世世讚仏乗之因、転法輪之縁也。十方三世諸仏心知⁽²⁾。

というように用いられてより、わが国においても『和漢朗詠集』⁽³⁾などにも引かれ、蓮如上人によっても『御文』に「讚仏乗の縁・転法輪の因」⁽⁴⁾とあらわされている。

本稿で「讚仏乗」というのは、仏陀所説の法への讚歎と法によって照し出された罪惡の自身への悲歎を表白する詩や歌という意味で用いたいと思う。それは讚仏歌または讚仏文学⁽⁵⁾ともいわれているものであるが、単なる讚仏の詩や歌ではなく、自身への悲歎を必ず表白しているという

点で、『白氏文集』より用いられている「讚仏乘」がもつとも適切な表現のように思われるからである。

さて、以上のような意味での讚仏乗の詩を歌った人たちは、仏教有縁の地には、インドをはじめとして、中国、日本、その他の国々に教え切れないほどあると思われるが、今はインドの仏教詩人、マートリチエータ (Matriceia) とシヤーンティデーヴァ (Santideva)、日本の妙好人、浅原才市を取り上げて、「讚仏乗の人々」として見てみたい。そして、その詩の作品としては、マートリチエータの『二百五十讚 (Satapanta, sanka)』⁽⁹⁾、シヤーンティデーヴァの『入菩提行 (Bodhicaryavatara)』⁽⁷⁾、浅原才市の『妙好人才市の歌』⁽⁸⁾とを依用する。

これらの作品を読んでみると、共通する心を汲み取ることができようと思われる。それは「信心」ということばで言い表したい心である。

仏教一般における信心の基本的了解では、「疑をはなれた清らかな心。仏法僧の三宝及び因果の理を信ずることで、仏道に入る第一歩とする。」⁽⁹⁾というところであるが、ここでは、親鸞聖人が『教行信証』・「信巻」で、

しかるに菩提心について二種あり。一つには堅、二つには横なり。

また堅について、また二種あり。一つには堅超、二つには堅出なり。

「堅超」・「堅出」は権実・願密・大小の教に明かせり。歴劫迂回の菩提心である。

提心、自力の金剛心、菩薩の信心なり。また横について、また二種あり。一つには横超、二つには横出なり。「横出」は、正雜・定散・他力の中の自力の菩提心なり。「横超」は、これすなわち願力回向の信樂、これを「願作信心」と曰う。願作信心は、すなわちこれ横の菩提心なり。これを「横超の金剛心」と名づくるなり。横堅の菩提心、その言一つにしてその心異なりといえども、入真を正要とす、真心を根本とす、邪雜を錯とす、疑情を失とするなり。⁽¹⁰⁾

※専修寺本によって少を小にする。

と述べていられるうちの、『大無量寿經』第十八願にもとづく「願力回向の信樂」、「横の大菩提心」という意味での信心であり、善導大師が『觀經疏』・「散善義」の「深信心」で、

「深信」と言うは、すなわちこれ深信の心なり。また二種あり。一つには決定して深く、「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫より已來、常に没し常に流轉して、出離の縁あることなし」と信ず。二つには決定して深く、「かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を撰受して、疑いなく慮りなく、かの願力に乗じて、定んで往生を得」と信ず。⁽¹¹⁾

と述べていられる、いわゆる機法二種の信心(二種深信)を構造とする信心である。

この他力の大菩提心、すなわち他力の信心に對すれば、インドの仏教詩人は自力の菩提心、自力の信心の人たちということになるのであるが、マートリチエータの『一百五十讚』序詩やシャーンティデーヴァの『入菩提行』第一章・第二章を窺ってみると、機法二種の信心に共通する心情を感じしめられる。したがって、それは他力の信心に生きる日本の妙好人たちと共通する心でもある。

先に述べたように、「讚仏乗」の詩とは、仏陀所説の法への讚歎と法によって照し出された罪惡の自身への悲歎を表白する詩や歌のことであるが、それは以上の意味において、信心の詩や歌ということでもある。

これまでの仏教研究の主流においては、インドの仏教といえ、大乘の經典や論釈が中心であり、それは仏陀釈尊や仏弟子、菩薩、論師たちの所説であり、法が表にあらわされていて、いくつかの例外を除けばいわゆる機はかくれてしまっている。これに對し、生身をもったインドの仏教詩人たちの歌う詩は、インドの仏教徒が實際に、自らの上に、仏教をいかに受けとめていたかを知ることのできる貴重な文献であり、機の内實があらわに歌われているのである。この点で、マートリチエータ及びシャーンティデーヴァの詩は極めて興味深いものである。

本稿が、インドの仏教詩人と日本の妙好人の「讚仏乗」の詩や歌を取り上げて、両者に共通するように思われる、法への讚歎と自身への悲歎を内容とする信心の構造を窺ってみようとする理由は、ここにあり。

註(敬称は略す)

- (1) 『大正藏』九卷、九頁、下段。
- (2) 『白氏文集』卷七十一、「香山寺白氏洛中集記」。
- (3) 『和漢朗詠集』卷下・「仏事(岩波・日本古典文学大系本、二〇〇頁)、『栄花物語』(岩波古典文学大系本、『栄花物語』上、四五〇頁)。ただし、『和漢朗詠集』では、「願はくは今生世俗の文字の業狂言綺語の誤りをもつて譏して当来世々讚仏乗の因転法輪の縁とせむ(願以今生世俗文字之業狂言綺語之譏 譏為当来世々讚仏乗之因転法輪之縁)」とあり、『栄花物語』では「願はくは今生世俗文字の業、狂言綺語の誤をもて、かへして当来世々讚仏乗の因、転法輪の縁とせん」とある。
- (4) 『御文』第四帖目、第四通(東洋文庫本「御ふみ」、底本・実如証判本、二七〇頁)。ただし、稲葉昌丸編『蓮如上人遺文』の二八九頁では、「讚仏乗の因転法輪の縁」とある(この「遺文」97の底本、対校本は、高田本五ノ十四、勝善寺本十二、名塩本二ノ四七、智玄本五ノ一九である)。また「遺文」87(二六一頁)では、「三仏乗縁転法輪因」とある(底本、対校本は本善寺蔵真筆本、高田本五ノ三、真宗寺本二二、名塩本二ノ三八、智玄本五ノ一である)。
- (5) 山田竜城「梵語仏典の諸文献」六九―八二頁に「讚仏文学」の項があり、アシユヴァゴーンヤ、マートリチエータ、ハルシヤ、クシェーメンドラなどの作品が扱われている。また「讚仏文学」について、脚註で次のように述べられている。「讚仏乗の語は、法華経方便品(大正九、九頁、C)にあらわれ、日本文学にも親しまれた名称である。いまは大乘以前の文学を讚仏文学とよんで区別する。望月仏教大辞典一六四頁c参看。」
- (6) D. R. Shackleton Bailey: The Śatapāṅśatka of Mātreceta, Sanskrit Text, Tibetan Translation & Commentary and Chinese Translation with an Introduction, English Translation and Notes.

Cambridge, 1951. の梵文を依用する。

- (7) P. L. Vaidya: Bodhicaryāvatāra of Śāntideva with the Commentary Pañjikā of Prajñākaramati. (Buddhist Sanskrit Texts—No. 12), Darbhanga, 1960. の梵文を依用する。
- (8) 楠 恭編『妙好人才市の歌』(昭和五十二年十一月、第二刷)、『昭和五十二年十一月、第一刷』。
- (9) 多屋頼俊・横超慧日・舟橋一哉編『仏敎学辞典』の「しんじん」の項(二八一頁、上段)参照。
- (10) 保存版・定本『親鸞聖人全集』第一卷、一三三頁。ただし、東本願寺版『真宗聖典』を参照して、延べ書にする。
- (11) 『真宗聖敎全書』一、五三四頁。ただし、延べ書にする。

一 マートリチェータの詩

マートリチェータについては、既に諸先学が研究していられるので、⁽¹²⁾ それらの成果にもとづいて、ここでは要点だけを紹介しておこう。

マートリチェータの生存年代はおよそ西暦二世紀あるいは二世紀末葉より三世紀にわたるものと見られている。初めは自在天に事えていたが、後に仏敎に改宗し、『四百讚』を造り、次いで『一百五十讚』を造つた。またカニシユカ二世へ送つた書簡(Mahārājakanikalakha)もある。彼は竜樹・提婆の流れを汲む空観派に属する大乘敎徒であつたようである。

さて、『四百讚(Catuhśataka)』は主に法くの讚歌であるが、⁽¹³⁾ 『一百

五十讚』は、一番最後の詩句より取つての別名が「信心による弁才の所産(Prasādpratibhodbhava)」とも呼ばれているように、信心が詩によつてあらわされている。梵文による『一百五十讚』全体の内容を見るには、D. R. Shackleton Bailey) の『マートリチェータの一百五十讚(The Śatapancāśatika of Matriceja)』所載の英訳、奈良博士の取意の和訳があるのだ、それらに譲つて、ここではその序詩によつてあらわされている信心について見てみよう。義浄三蔵によるシナ訳もあるので対照しておく。⁽¹⁵⁾

sarvadā sarvathā sarve yasya doṣā na santi ha |

sarve sarvabhisāreṇa yatra cāvasthitā guṇāḥ || (1)

(一) 常にすべての点において、その人にはいかなる欠点もない。どんな場合でも、その人にはあらゆる徳が確立されていた。⁽¹⁶⁾

世尊最殊勝 善断諸惑種

無量勝功德 総集如来身

と、先づ仏徳の讚歎から始まっている。

tam eva śaraṇaṃ gantuṃ taṃ stotuṃ tam upāstum |

tasyaiva śāsane śhātum nyāyaṃ yady asī cetana || (2)

(二) 彼に帰依し、彼を讃え、彼に仕え、彼の教えに従うことは、もし心のはたらきを持っている者(＝人間)であるならば、ふさわしい〔ことである〕。)

唯仏可帰依 可讚可承事
如理思惟者 宜応住此教

次いで、その仏に対して帰依し、讃え、仕え、その教えに従うことは、心のはたらき(cetana)を持っている人間にとってふさわしいことであると述べ、

savasanaś ca te doṣā na santy ekasya tāyinaḥ |
sarve sarvavidah santi guṇās te canapāyinaḥ || (3)

(三) ただ一人の救護者であるあなたに習気と欠点はない。全知者であるあなたにあらゆる徳はそなわり、変らない。)

諸悪煩惱習 護世者已除
福智二俱円 唯尊不退没

と、再び徳を讃歎し、

讃仏乗の人々

na hi pratīviṣṭo 'pi manovākkāyakaṛmanasū |
saha dharmeṇa labhate kaścid bhagavato 'nāram || (4)
(四) たとえ悪意を抱いた者であっても、意と口と身の行為について、法をもって世尊にいかなる弱点も見出す〔ことはできない〕。)

縦生悪見者 於尊起嫌恨
伺求身語業 無能得瑕隙

敵対者すら、その弱点が見出しえないことを述べ、

so 'haṃ prāpya manusyaṭvaṃ sasaddharmamahotsavam |
mahānāvayugacchidrakūrmagrivārpaṇopamam || (5)

(五) この私は正法〔を聞く〕大きな喜びを持つ〔ことのできる〕人身を得て、あたかも大海で〔浮木の〕軛くわの穴に亀が首を入れることが〔できた〕ようである。)

記我得人身 聞法生歡喜
譬如巨海内 盲龜遇楫穴

と、仏法を聞くことのできる人間に生れた喜びをいろいろな經典に見出される盲亀浮木の譬喩をもってあらわしている。これこそ、インドの仏教詩人にも日本の妙好人にも共通する信心の喜びを率直に表現する言葉であり、典型的に「人身受け難し、今すでに受く。仏法聞き難し、今すでに聞く」と表白されているものである。

anīyatāvyānusṛtāṃ karmacchidrasaṅśayām |

ātṭasārāṃ karīṣyāmi kathāṃ nemāṃ sarasvatīm || (6)

(六) 不確実さから発せられ、業の過失によってあやふやな、

この「詩の」言葉をどうしたら「私は」空虚なものとしないうで「すむで」あろうか。

忘念恒随逐 惑業墮深坑

故我以言詞 歎仏実功德

奈良博士はこの第六偈を、

だから

私の言葉はむなしくても

業の深いせいかあやふやでも

言葉を実のあるものにしてみたい

と意識していられる。

ここには、たまたま、人身を得て仏法を聞くことができたのであるが、その仏法に照らし出されたわが身は、「業の過失によってあやふやな言葉」しか持ちあわせていない、「業の深い」自分であるということが表明せられている。

經典や論書には、釈尊とか菩薩という、覺者または覺者に近い人達によって信心ということが述べられている。その信は「澄淨の義」といわれ、心が澄み淨くなる意と普通理解せられているが、生身をもったこの仏教詩人の上に成就した信心は、「業の深い」自分が見えてくる透明な心であるのであろう。

īty asaṅkhyeyaviśayān avetyāpi guṇān muneh |

tadekadeśapraṇāyāṅ kriyate svāthāgauravāt || (7)

(七) このように考えて、牟尼のもるもの徳を数えられないものと知ってはいるが、自分のため「にということ」を重んずるから、その「徳の」一部分「なりとも」讚仏のこころを「ここに」あらわす。

牟尼無量境 聖德無辺際

為求自利故 我今讚少分

ここで、「自分のため〔にということ〕を重んずるから」と述べているのは、マートリチエータは大乗仏教徒であるから、当然利他ということとを重んずるのであるが、わが身のほどを知っているが故に、他の人々のためにとはいはず、「自分のため」といつているのであろう。これは単なる謙遜の言葉ではなく、「業の深い」自分と信知する信心の言葉と理解したい。

序詩は、この後また二偈あるのであるが、大体この七偈までで、これから歌おとするマートリチエータの意向はあらわされている。ここに見出される信心の構造は、仏陀の徳や法への讃歎と業の深い自身への悲歎からなるものであるといえる。このような信心の構造は、次に取り上げるシャーンティデーヴァにおいては、より明確にあらわされてくる。

註

- (12) D. R. Shackleton Bailey: *The Śatapathaśatka of Matrceṭa*. Introduction (一一七頁)。また、その書評、辻直四郎「マートリチエータ 一百五十讚の新版について」(『東洋学報』第三十三卷三・四号、昭和二十六年(一九五二)十月、一五五—一七二頁所載。『辻直四郎著作集』第三卷、二七三—二八八頁、所収)を参照。なお、義浄『南海寄帰内法伝』巻第四・

讚仏乗の人々

- 三十二「讚詠之礼」の項に摩陞里制吒についての記述がある(『大正蔵』五十四卷、二二七頁、中段—下段)。また、ターラナータ「印度仏教史」(寺本婉雅訳註本、一四四—一四九頁)、荻原雲来「摩陞哩制吒阿遮梨耶及び其の他の人の時の事蹟」(『宗粹』第十一号、明治三十年十二月、所載。『荻原雲来文集』一三七—一四〇頁、所収)、渡辺海旭「摩陞哩制吒讚仏頌の原文」(『宗教界』第八卷第八号、明治四十五年八月、所載。『靈月全集』上巻、六五三—六六一頁、所収)、奈良康明「仏教詩人マートリチエータの思想的立場」(『印度学仏教学研究』第二卷第一号、昭和二十八年九月、一三五—一三六頁、所載)、金倉円照「マートリチエータ雑説」(『文化』第十八卷第三号、昭和三十一年七月、所載。『馬鳴の研究』九二—一六頁、所収)、山田竜城「梵語仏典の諸文献」のマートリチエータの項(七七—七九頁)、筑摩版・世界古典文学全集「仏典」Iの「解説」(四二五—四二六頁)参照。
- (13) 註(12)であげた金倉円照「マートリチエータ雑説」の「二」「法」の用例「の項」(一〇四—一〇六頁)参照。
- (14) 註(12)の最後にあげた「仏典」Iに収められている(三二五—三三七頁)。
- (15) 義浄訳「一百五十讚仏頌」(『大正蔵』三十二卷、七五八頁、中段—七六二頁、上段)。
- (16) 以下の梵文及びパーリ文の和訳は、すべて拙訳である。生硬の感は免れないが、直訳を試みたつもりである。諸先学の訳を参照させていただいた。

二 シャーンティデーヴァの詩

シャーンティデーヴァの出生・生存年代などについては、マートリチエータと同じく、伝説に彩られていて信頼しがたいものであるが、金倉博士は「七世紀の後半に生れ、大体七〇〇年頃に活躍したとみるのが、

妥当な推定であろう。」と述べていられる。マートリチェータより約五百年後の人である。五百年と時代は隔たっているが、大乘の「菩提行」を詩であらわしてある『入菩提行』⁽¹⁷⁾に流れている心情はマートリチェータと共通のものがあ、それ以上に信心についても明確にあらわされている。

『入菩提行』は、梵文では十章総計九一三偈であるが、第一章は「菩提心の讚歎」とあり、第二章は「罪惡の懺悔」という標題を持っている。この第一章と第二章の標題を見ただけでも、「菩提心の讚歎」とは菩提心を起さしめる仏と法への讚歎であり、「罪惡の懺悔」とは自身への悲歎であって、これらによって信心の構造を端的に標示しているように思われる。

従って、この第一章と第二章を中心にして、その詩を取り出して、マートリチェータの詩心と対照してみれば、具体的にその信心の構造を把握することができるであろう。幸いにも梵文『入菩提行』には、金倉博士の和訳があるので、それを参照しながら訳していくこととする。また天災のシナ訳⁽¹⁸⁾もあるので、対応するものは添えておく。

sugatān sasutaṃ sadharmakāyaṃ
 prāṇipatyādarato 'khlīṃśca vandyān |
 sugatāmajasaṃvarāvātāraṃ
 kathayisyāmi yathāgamāṃ samāsāt || (1)

(一) 「仏」子(=菩薩)たちと共なる、法身を持てる、もろもろの善逝とすべての敬うべき者たちに恭しく敬礼して、善逝の子たちの律儀への趣入(=菩薩行の実行)を聖典⁽¹⁹⁾に従って「私は」簡潔に説こう。

如仏妙法体無辺 仏子正心歸命礼
 仏甘露戒垂覆護 我今讚説悉依法

と、先づ三宝に対する帰依の心情を表白し、

na hi kiṃcidapūrvamātra vācyaṃ
 na ca saṃgrathanakausālaṃ mamāsti |
 ata eva na me parārthacintā
 svamano vāsāyitūṃ kītaṃ mayedaṃ || (2)

(一) ここには目新しく語られるべきことは何もない。また私は「そのような」文才もない。
 だから他人のためということは考えることなく、私自身の意⁽²⁰⁾を清めるために、これ(=この書)が私によって作られたのである。

此説無有未曾有 亦非自我而獨專

我無自他如是時 乃自思惟觀察時

と、次いで造偈の意趣が述べられている。「だから他人のためというこ
とは考えることなく、…」という個所は、マートリチエータの、前出の
第七偈の中に「自分のため〔にということ〕を重んずるから」とある言
葉と同じような意があらわされているように思われる。

mama tāvadanena yāti vṛddhiṃ

kuśalaṃ bhāvayitūṃ prasādhavagāḥ |

atha matsamadhātūreva paśyedaparō

'pyenamato 'pi sārthako 'yam || (3)

(三) 先づこれによって、善を實行しようとする私の澄浄な心 (pra-
sāda) の衝動は強く増進する。それ故、私と同じ性質の他の人がこ
れ (＝この書) を見るならば、それはまたそれで意義があることであ
らう。

如是發心觀察時 能令我此善增長

時見如是娑婆界 此乃是彼仏世尊

そして、この『入菩提行』が「讚仏乘之因、転法輪之縁」として、他
の人々のために、転ぜられることがあるならばとの願いが述べられてい
る。ここに「澄浄な心」というのは、「信心」ともシナ訳される prasāda
である。

kṣānasamṛpādiyaṃ sudurlabhā

pratilabdha puruṣārthasādhanī |

yadi nātra vicinityate hitaṃ

punarapyeṣa samagamah kutah || (4)

(四) 「人間に生れ、法を聞くなどの」この機会に恵まれることは
きわめて得難い。「これを」得て、人間の目的〔である解脱〕を成
就する〔ことができる〕のである。
もし、ここで「その」利益を認識しないならば、どうして再びその
廻り会いがあるであろうか。

此界利那難得生 得生為人宜自慶

思惟若離菩提心 復次此來何以得

ここにも、マートリチエータの、前出の第五偈と同じく、人身の得難

きこと、その人身を得てこそ、人間の目的（＝解脱）が達せられることが述べられている。この事は、『入菩提行』の第四章「菩提心の不放逸」に強調せられている。すなわち、

kada tathāgatopādāṃ śradhāṃ mānasyameva ca |

kuśalābhyāsasyogyatvamevaṃ lapsye 'tidurlābham || (15)

（十五 如来の出世、淨信（śradhā）、人身、善を反覆するに適應の状態、このような極めて得難いことを「また」「何時」「私は」得らざらうか。）

とあり、また、

ata evāha bhagavān-mānuṣyamatiḍurlābham |

mahārṇavayugacchidrakūrmagrivārpanopamam || (20)

（二〇 この故に世尊は言われた、——人身は極めて得難い。「それは」あたかも大海で「浮木の」軀の穴に亀が首を入れることが「できた」「ようである」「と」。）

とある。ここでも、マートトリチュエータの前出の第五偈と同じく、盲亀浮

木の譬喻をもって人身の得難きことがうたわれている。これは、得難き人身を得た今こそ、法を聞き、菩提心にめざめよとの世尊の教えであるが、それがそのままその世尊の教えを自からの身に頂いた詩人の言葉となつて、よくぞ得難き人身を得、よくぞ聞き難き仏法を聞くことを得たと、自身が人間に生れたことへの讃歌となり、仏法を説き給うた世尊への報恩の表白となつているのである。

これは、念仏の信一つに生きた、日本の妙好人にも共通の心情である。「人身得難し」の文は、『法句経』をはじめ、いろいろな経典にあらわされているので、後に経典より取り出し、紹介してみたい。

さて、もう一度、第一章にもどつて、菩提心を讃歎するところを見てもみよう。

kadalīva phalaṃ vihāya yāti

ksayamanyat kuśalaṃ hi sarvameva |

satatam phalati ksayaṃ na yāti

prasavyeva tu bodhicittavṛkṣaḥ || (12)

（一二 他の善はすべて、芭蕉（＝バナナ）樹のように、実を置き去りにして（＝実がなると）、消滅してしまふ。しかし、菩提心の樹は実を結び、決して消滅しない。ただ豊かに稔るだけである。）

芭蕉不実而生実 生実芭蕉而身謝

菩提心樹而清淨 恒生勝果而不尽

krtvāpi pāpāni sudāruṇāni

yadāśrayāduttarati kṣaṇena |

śūrāśrayeṇeva mahābhayāni

nāśrīyate tatkathamajñasattvaḥ || (13)

(一三 非常に恐しい、もろもろの罪惡を作しても、これ〔菩提心〕を所依とすれば、たちまちに免れる。あたかも勇猛の士を所依とすることによって大いなる無畏があるように。無知の衆生たちによってそれ〔菩提心〕がぶつして所依とせられないであろうか。)

已作暴惡衆罪業 依菩提心利那脱

勇猛依託無大怖 彼癡有情何不依

yugāntakālānalavanmahānti

pāpāni yannirdahati kṣaṇena |

yasyānuśaṅgśānamitānuvāca

maitreyanāthaḥ sudhanāya dhimān || (14)

讚仏乘の人々

(一四 それは劫末の時の火のように大なる罪惡をたちまちに焼き尽くす。それ〔菩提心〕に対して、限らない讚歎を智慧ある弥勒尊は善財〔童子〕に向って語った。)

譬如劫尽時大火 利那焚燒罪業薪

若讚慈尊無量言 是曰善哉之智者

以上、ここには数偈を引用したのみであるが、『入菩提行』第一章は、三六偈をもって「菩提心の讚歎」が行われている。

次に、第二章「罪惡の懺悔」を見てみよう。

taccittaratnagrahaṇāya samyak

pūjāṃ karomyeṣa tathāgatanām |

saddharmaratnasya ca nirmalasya

buddhātmajānāṃ ca guṇodadhinām || (1)

(一 この寶石のやうな心〔菩提心〕を得るために、これなる「私」は「もろもろの如来と、無垢なる、寶石のような正法と、大海のよ」うな功德を有する仏子たちとに対して正しく供養を行なう。)

と、やはり先づ三宝に対する帰依の真情をあらわし、以下美しい言葉を連ねて三宝を讃歎していくのであるが、第二七偈に至ると、

vijñāpayāmi saṃbuddhān sarvadikṣu vyavasthitan |
mahākaraṇīkārṇscāpi bodhisattvān kṛtāñjalih || (27)

(二七) すべての方角に住するもろもろの正覚者と、大悲を有する菩薩たちにも、合掌をして「私は次のように」告白する。

anādimati saṃsāre janmanyatraiva vā punaḥ |

yanmayā paśunā pāpaṃ kṛtaṃ kṛitameva vā || (28)

(二八) 無始の輪廻において或いはまた今生において、獣の「如き」私によって罪悪がなされ、或いは「他をして」なせしめたのであるが、

yaccānūmoditaṃ kimcidatmaghātāya mohataḥ |

tadatyayanā deśayāmi paścātāpena tāpitaḥ || (29)

(二九) そしてまた愚かさのために、わが身を滅ぼすことを多少なりとも是認し「てき」たのであるが、そのような過失を後悔し苦し

められて「私は」発露する。

というように、自身の罪悪の告白がはじまる。第二八偈の「無始の輪廻において或いはまた今生において、……」という言い方は、善導大師の二種深信の「自身は現に罪悪生死の凡夫、曠劫より已来……」の言葉を想起させる。

raṇatraye 'pakāro yo mātapiṛṣu vā mayā |

guruṣyaṇyeṣu vā kṣepat kāyavāgbuddhibhīḥ kṛtaḥ || (30)

(三〇) 三宝に対し、或いは父母に対し、或いは師に対し、その他の人々に対し、私によって狂乱から身と語と意によって加えられた侮辱がある。

anekadosadustena mayā pāpena nāyakāḥ |

yatkr̥taṃ daruṇaṃ pāpaṃ tatsarvaṃ deśayāmyaham || (31)

(三一) 導師(＝仏陀)なごよ、多くの過失によって墮落した罪悪の私によって行われたすべての恐しき罪悪を私は発露する。

kathaṃ ca niḥsarāmyasmānītyodvego 'smi nāyakāḥ |

ma bhūme mityaradaksine pāpasamcaye || (32)

(三二) 導師たちよ、いかにして「私は」これ(＝罪惡)より逃れようか。常に不安である。積罪が減しないうちに猶予なく死が私にどうか生じないように。

このように、自身の罪惡への悲歎は深い。以上において見てきた如く、インドの仏教徒の信心は法への限りなき讃歎と自身への限りなき悲歎を内容とするものであることが知られる。

註

- (17) 金倉円照『悟りへの道』の「解題」三三二―三三三頁。「解題」は著者、年代、著述、内容、出版と翻訳、結びからなっていて、『入菩提行 (Bodhicaryāvatāra)』及びその作者、シャーンティデーヴァ (Śāntideva) について、詳しく解説してある。
- (18) 註(7)であげた Vaidya 本を依用する。
- (19) 天息災訳『菩提行経』(『大正蔵』三十二卷、五四三頁、下段―五六二頁、上段)。なお、最近の梵文英訳に、Marion L. Maties: *Entering the Path of Enlightenment, The Bodhicaryāvatāra of the Buddhist Poet Śāntideva*, London, 1970 があり、詳細な Introduction や Notes などが付せられている。

三 浅原才市の歌

さて、大陸から日本へ仏教が公的に伝来したのは、西暦五三八年とも、五五二年とも伝えられているが、真に日本の仏教となったのは鎌倉時代である。その鎌倉時代に成立した浄土真宗が根をおろした大地から、妙好人と呼ばれる人々があらわれた。現代における妙好人への評価は一樣ではなく、立場や視点の相違によって、まざままな状態である。たしかに、体制の中の模範的人間像そのものの妙好人もあるが、一概にそれと律し切れない人もある。今、ここに取り上げる浅原才市も、その一人である。独学でおぼえた文字でもって自己の信心をたどった詩的方法で表現して残したことによって多くの人々に注目せられてきた。表現はたどたどしいが、妙好人の信心をあます所なくあらわしたからである。

浅原才市についての、紹介・研究やその詩集の出版は先学の方々がしている⁽²⁰⁾ので、ここでは、その助けをかりて、マートリチエータヤンヤーンティデーヴァの場合と同じく、必要なことだけあげておく。

浅原才市は嘉永三年(一八五〇)二月二十日、島根県邇摩郡大浜村字小浜(現・同郡温泉津字小浜)に生れた。少年の頃、船大工の徒弟となり、二十五歳の時、結婚し船大工として一家を構えた。父の感化もあって、浄土真宗の教えを聞くようになったが、才市が最も真剣に法を求め

た時期は、四十五歳頃から六十歳頃までであったようである。六十歳頃、彼は信心決定した。その信心決定による法への讃歎と自身への悲歎が内にとどめられなくなって、五十歳頃より船大工から下駄作りの仕事に変わっていたので、その木屑や手近の紙に文字であらわすようになった。⁽²¹⁾

下駄の木屑や紙に書いた信心の表出を、夜になるとノートに書き写した。才市がノート書きを始めたのは、六十四歳（大正二年）の秋頃からというが、昭和七年一月十七日、八十三歳の高齢で往生するまでの約二十年間に、九十冊ぐらいのノートを書いたという。大体、一年に四冊半を平均して書き、失われたノートのことを考えると、もっと沢山書いたのではないかと推定せられている。

藤秀環⁽²²⁾師や鈴木大拙師の紹介せられたものもあるが、ここでは、楠恭師編の『妙好人才市の歌』(一)と(二)の二冊によって、才市の信心の構造を見てみよう。

失づ、第一冊目の第一ノート（大正三年、六十五歳の作）・第三二番の歌。

三二、あさましや。

さいち、こころわ、あさましや。

もをねんがいちどにでるぞ。^(妄念)

にがにがしいあくのまぜりたひがもゑる。^(調った)

あくのまぜりたなみがたつ。^(火)

あさましや、ぐちのまぜりたひがもゑる。^(愚痴)

じやけんもの、あさましや、

とどめられんか。

さいちがこころ、くよくよと、

をきるこころをたするみれば、^(尋ね)

天にぬりこすさいちのこころ。^(を乗り)

ここにちしきのごけとをあり。^(細塵)

これ、さいち、ここが、そなたのきさばぞよ。^(聞き場)

ありがとをござります。

みだのほんぐわん、なむあみだぶができたから、^(本願)

われがあんずることわない。^(お前が)

きけよ、きけよ。

なむあみだぶをききぬれば、

われがをを上これにある。^(往生)

なむあみだぶわ、われがもの

ごをんうれしや、なむあみだぶつ。^(妄念)

もをねんのをきはをきけば、きほをいいたい。^(起き場)

なむあみだぶつ。

このこころでじいほをみじんせかいを、^(十方微塵世界)

ぶつやほさつやを、さまとあすんでをるが、

このこころ、なむあみだぶをたべてあすんで、

なむあみだぶと、ともにひくらし、
ごをんうれしや、なむあみだぶつ。

ここには、端的に、信心が自身への悲歎であり、自身への悲歎を縁として、触れることができる法への讃歎であることが歌われている。また第三四の歌では、

三四、さいちよい。どがなかい。

へゑ、ありがたいのもあるし、

はづかしいのもあるし、

あさましいのもあるし、

ありがたいのが、をや、さまで、

あさましいのが、わたくしで、

ごゑんにあゑば、きはをいいたい。

なむあみだぶつ。

ごをんうれしや、なむあみだぶつ。

(ごゑんは説教又は法会のことを云ふ―編者)

と歌われている。ここでは、「ありがたいのが、をや、さまで、あさましいのが、わたくしで」と法への讃歎と自身への悲歎を、独特の表現であらわしている。また、はじめに「さいちよい。どがなかい。へゑ、ありが

たいのもあるし、はづかしいのもあるし」と、一人で対話がなされているが、信心を獲得した人には、一人において法を讃歎する位と自身を悲歎する位の二つの位が同時に与えられる。そこに一人で対話が行われ、悲喜交流して、信心はより一層深められていくのである。まさに『撰大乘論』でいう「慈言分別 (mano-jalpa)」である。

次に、第二冊目に収められている第三ノート(大正十年の後半及び十一年の前半頃、七十二及び三歳頃)から一つ。

57、うみのうしをも、さしひ〔き〕あるよ。

わしのころにさすしをわ、

さんぎ、くわんぎのさしひきのしを。

くわんぎのしをわ、さすしをで、

さんぎのしをわ、ひきしをで、

さんぎ、くわんぎのさしひきのしを。

これがたのしみ、なむあみだぶつ。

同じく第二冊の第四ノート(大正十三年、七十五歳の頃)から対になった二つを取り出してみよう。

54、さんぎの(御縁)ごゑんにあうときわ、

ときも、(時)きもあさましばかり。

これが、くわんぎのもととなる。

なむあみだぶのなせるなり。

55、くわんぎのごゑんにあうときわ、

ときも、(云わむ)ところもゆわずにをいて、

わしもくわんぎで、

あなたも、あなたもくわんぎ、

これがたのしみ、なむあみだぶつ。

以上の歌でわかるように、才市の信心は機法二種の深信が基調となっている。それは先に取り上げたマートリチェータならびにシャーンティデーヴァの表白と共通するものであるが、更に得難き人身と聞き難き仏法への讃歎も共通している。

第一冊・第一ノートでは、

一四、(二座の誦教)いちぎのせい京どこにある。

いちぎのせい京どこにある。

なむあみだぶのじぎのせい京、(直きの)

このだいをんにはじめてををた、(大恩)
(会う)

わたくしがしやわせ。

(万劫)まんごをにも、(億劫)をうごをにも、

まれなことにあわせてもらいました。

ごをんうれしや、なむあみだぶつ。

と、「(万劫)まんごをにも、(億劫)をうごをにも、まれなことにあわせてもらいました」

と聞き難き仏法に値遇しえた喜びを語り、第二冊・第八ノートでは、

80、(昭和二十四年十月十一日付の入江師より藤先生宛のハガキの

中のもの)

わしや、しやわせ、

ごくらくもろをての、

京が(境涯)いききてをるよの。

(人間)にんげんにうまれさせてもろをた、

わしがしやわせ。

と、人間に生れさせてもらったからこそ、極楽をもらった境涯を生きている、すなわち信心に生きることのできる人間に生れた幸せを讃歎している。

註

(20) 註(8)であげた楠恭編『妙好人才市の歌』(一)の巻末に付せられている「浅原才市について」及び「編輯の記」、(二)の巻末に付せられている「大拙先生と妙好人」にまとめて述べられている。鈴木大拙『日本的靈性』(鈴木

大拙全集』第八卷所収)、同『妙好人』(鈴木大拙全集』第十卷所収)、同編『妙好人浅原才市集』参照。

(21) 「墨美」第二七八号・「妙好人・才市の書」に紹介せられている。

(22) 藤秀璋『大乘相應の地』、同『純情の人々』。

四 『無量寿経』第十七・十八願成就の文

以上、インドの仏教詩人であるマートリチエータとシャーンティデーヴァ、日本の妙好人、浅原才市を「讚仏乘」の人々として、その詩と歌によって、共通しているように思われる信心の構造を見てきたのであるが、それは法への讚歎と自身への悲歎であり、善導大師の機法二種の信心と同じ構造である。インドの仏教詩人は、浄土真宗の立場からすれば、既に述べたように、自力の信心(自力の菩提心)の人たちであるかもしれないが、少くとも、その詩によってあらわされているものは、二種深信と共通するものが認められる。

ところで、このような信心の構造は、經典の上ではどのようにあらわされているのであろうか。

それは、既に拙論において、度々述べてきたところであるが、⁽²³⁾『無量寿経』に見い出される「諸仏の称名」と「衆生の聞名」の対応であらわされているものであろう。それが最もよく示されているのは、いわゆる十七願・十八願成就の文の個所であるが、ここでは、梵文の相應個所を見てみよう。

tasya khalu punar ānanda bhagavato 'mitabhāsyā tathā-gatasya dāsasu dikṣv ekaikasyāṃ diśi Gaṅgānadivālukāsa-meṣu buddhākṣetreṣu Gaṅgānadivālukāsamā buddhā bhā-gavanto nāmadheyam parikīrtayante, varṇam bhāṣante, yaśaḥ prakāśayanti, guṇam udirayanti.
tat kasya hetoh.

ye kecit sattvās tasya bhagavato* 'mitabhāsyā tathāgata-sya nāmadheyam śrīṇvanti, śrutvā cāntāśa ekacittotpādān-apy adhyāśayena prasādasahagatena* cittam* utpādayanti, sarve te 'vaivartikātāyām samtiṣṭhante 'nuttarāyāṃ sam-yaksambodheh.⁽²⁴⁾

※印は藤田宏達博士「梵文補正表」(『梵文和訳無量寿経・阿弥陀経』所収)による。

(また、実に、アーナンダよ、十方の各々の方角にあるガンジス河の砂[の数]に等しい[ほどの多くの数の]仏国土において、ガンジス河の砂[の数]に等しい[ほどの多くの数の]諸仏・世尊たちはかの世尊アミターバ如来の名号を称讃し(buddha bhagavanto nāma-dheyam parikīrtayante)、讚歎を説き、名声を説き明し、功德を称揚する。

それは何故であるか。

およそいかなる衆生たちであっても、かの世尊アミターバ如来の名号を聞き (sattvās tasya bhagavato 'mitābhasya tathagatasya nāmadheyam śrīṃvanti)'、聞きをおわって、たとへ一念「とこうわすかな時間、一たびの心」の生起でも、淨信 (prasāda) にともなわれたい深き志向をもって、「極樂国土に生れたいという」心を生起するならば、かれらはすべて、この上ない正しいさとより退転しない状態に安住するからである。)

ここには、諸仏の称讚するアミターバ (無量光) 如来の名号 (諸仏の称名) を衆生たちが聞いて (衆生の聞名)、不退転に住するのであるとあらわされている。

この諸仏とは、アミターバ如来の名号に表現せられた本願のいわれを聞いて、本願すなわち仏心にめざめ、信心獲得した (聞其名号、信心歡喜)、諸仏に等しい位 (等覺) の人のことであり、この位の人こそ法をどこまでも稱讚できるのである。ところが、信心の獲得は、一面において、凡夫の自覚を深くうながすものであるから、衆生の位、すなわち凡夫の位を賜わることであり、この位においてアミターバ如来の名号を聞くことによって、それがそのままでも自身を聞いていくこととなり、自身の罪惡深重なることを信知せしめられ、自身に悲歎の言葉に向けてにはいられないこととなるのである。まさに、それは「一人二位」⁽²⁵⁾といわれる信心の構造なのである。

既にいくつかの拙論で発表してきたように、諸仏の称名ということ、以上のような意味を持っていて、それは「衆生の聞名」と呼応しており、インドの仏敎詩人たちや日本の妙好人たちにおいては、法への限りなき讚歎と自身への限りなき悲歎となって、表出されるのである。

註

- (23) 「梵文『無量壽經』における諸仏と衆生の呼応——特に称名と聞名に關して」(註)、(同朋仏敎) 第五、六・七、八号所載、「無量壽經」における称名思想」(『日本仏敎学会年報』第四号所載) など。
- (24) Asanui, Ashikaga: Sukhavativyūha, p. 41, 4. 25-p. 42, 4. 8.
- (25) 大河内了悟「行信二卷に於ける二つの愚考——一人二位の念仏と信卷の本末無分」(『親鸞敎学』第十八号) 一三二頁。

五 諸經典における「人身得難し」の文

このような信心を獲得できたことは、得難い人身を得、聞き難い法を聞き得たことによると、「人身の得難いこと、法の聞き難い」ことを、インドの仏敎詩人も、日本の妙好人も感動をもって歌っているが、この「人身受け難し、仏法聞き難し」の文は、既に經典に見出される。そこで、次にこれを主な經典の上に見てみたい。ただし、「如来 (ブツダ) の出世の得難い」ことも、「人身得難し」の文と同じような譬喩をもつ

てあらわしてあるが、ここでは、「如来(ブッダ)の出世は得難い」という文だけで出ているものは取り上げないこととする。

さて、この「人身得難し」の文は、『ダンマパダ (dhammapada, 法句経)』系とその他の諸経典に大別して見ることが出来る。『ダンマパダ』系の「人身得難し」の「難し」は *kiccha* という語であらわしてあるのに対し、その他の諸経典では、原語が確められないものもあるが、サンスクリットでは *durlabha* (得難し)、*atidurlabha* (極めて得難い)、*paṇīri* では *dullabha* (得難し)、*adhicca* (偶然の、めったにならぬ) などの語であらわしてあるからである。(もっとも、『ダンマパダ』タカター (dhammapadattīhakatā) 『法句経註』・一三五によれば、*kiccha* と *paṇīri* を *dullabha* と置き換えてあらわしてあるから、意味の上では大きな相違はないであろうである。)

一 『ダンマパダ』系の「人身得難し」の文

先づ、*paṇīri* の『ダンマパダ』・一八二を引くまゝ、

182. *Kiccho manussapaṭilāho,*

kicchaṃ maccāna jīvitam,

kicchaṃ saddhammasavaṇam,

kiccho Buddhānam uppādo.⁽²⁶⁾

讚仏乘の人々

—XIV Buddhavaggo—

(一八二 人身を得ることは難しい。

死すべき者たちに寿命があることは難しい。

正法を聞くことは難しい。

諸仏の出現は難しい。)

とある。*paṇīri* 語は、現在のスリランカなどインドより南方の国々に伝えられた仏教聖典用語であるが、北西インドのガンダーラ語で写された法句経が、十九世紀末に中央アジアのコータン(于闐・和田)で発見され、多くの学者の研究を経て、ジヨン・ブラフ博士の厳密な研究によって、『ガンダーラー・ダルマパダ (Gandhāri dharmapada)』と題して、蘇った。その二六三偈は、*paṇīri* 語の『ダンマパダ』・一八二に対応する。次に、それを見てみよう。

263. *kicche maṇuṣā-pradilābhu*

kiccha maccaṇa jivida

kicche sadhama-śramaṇa

kicche budhana upaya.⁽²⁷⁾

—XVI. Prakīrṇaka—

とあり、インドの南と北に別々の俗語で伝わったにしては、不思議なほどほとんど一致している。

ところで、従来知られなかつた法句経が、最近(一九七九年)、インドで出版された。それは、チベットで発見された写本で、シュクラが『仏敎混合梵語・法句経(The Buddhist Hybrid Sanskrit Dharmapada)』と名づけて世に紹介した。その三三四偈が、パーリ語の『ダンマパダ』に対応するのであるが、それによれば、

334. kiccho buddhana uppādo |

kicchā dhammassa deśana |

kiccho sūddhapatiābho |

kicchan maccāna jīvitam ||⁽²⁸⁾

—XVIII, Dadanti—

とあつて、パーリ語の『ダンマパダ』・一八二とは、行の順序も違つてゝる。kiccho manussapatiābho に対応する個所が、kiccho sūddhapatiābho (清浄を得ることは難し)となつてゐる。

シナ訳では、『法句経』・「述仏品」ならびに『法句譬喻経』・「述仏品」に、同文で次のように訳されてゐる。

得生人道難

生寿亦難得

世間有仏難

仏法難得聞⁽²⁹⁾

パーリ語とガンダーラ語の『法句経』に一致するが、後の二行が入れ変つてゐる。

二 『ダンマパダ』系以外の諸経典における「人身得難し」の文

「難し」を kiccha という語であらわしている『ダンマパダ』系以外の諸経典における「人身得難し」の文が、ここに入るのであるが、譬喩のあるもの、ないものなど、大体四種類に分けられる。

最も古い初期経典と認められている『スッタニパータ』、『ダンマパダ』、『テラ・ガーター』では、dullabha の語によつて、「ブツダの出世の得難い」ことを述べていても、「人身の得難い」ことには言及していないので、ここでは取り上げないが、このような古い初期経典の傾向から、「得難い」という文は、「ブツダの出世」について述べるのが最も古く、「人身得難し」は、これにもとづいて成立したものであらうといふ見解も既に出されている⁽³⁰⁾。なお、以下、取り上げる経典の配列順序については特に意図するところはない。

(1) 譬喩なしの「人身得難し」の文

(a) 人身甚難得、已得人身。仏経戒復難得値聞、已得聞仏経戒。信入仏道復難、已入仏道。守持経戒復難。

——法炬訳『仏説恒水経』⁽³¹⁾

これは西晋・法炬訳の経典として、高麗版を底本とする『大正蔵』にも入れられているが、『出三蔵記集』では、「新集続撰失訳雜経録第一」に載っている「恒河譬経一卷抄」⁽³²⁾に比定せられていて、既に梁の僧祐の時代において、訳者が不明の経典である。『歴代三寶紀』や『開元釈教録』では法炬としているが、疑わしい。またパールの『増支部』の中に対応する経典があるが、「人身甚難得」に当る箇所はない。

(b) 人身極難得 出家亦復然

退釈師子王 自今不重親

——求那跋陀羅訳『雜阿含経』・卷第二十三(六〇四)⁽³³⁾——

この偈文はアショカ王の伝説に出てくるもので、『阿育王伝』でも「人身難得、仏法難値」⁽³⁴⁾とあるが、梵文『ディヴィヤアヴァダーナ』の対応箇所には、

durlabham prāpya māṇuṣyaṃ

pravrajyāṃ ca sukhodayāṃ |

sākhyaśiṃhaṃ ca śāstaraṃ

punastyakṣyāmi durmatīḥ || (68)⁽³⁵⁾

(六八) 得難い人身を得て「いながら」、

幸福な結果を生ずる出家となることを「得ていながら」、
釈迦族の獅子(＝釈尊)を大師として「得ていながら」、
愚者として再び「私は身を」棄てる(＝死ぬ)であろう。)

とあり、梵文では「得難き人身を得て」とあって、ただちに「人身極難得」や「人身難得」ではない。このような例は他にもあって、例えば、

(c) 人身甚難得 得已行放逸

為放逸所迷 命終墮地獄

——瞿曇般若流支訳『正法念処経』・卷第三十二——

人身極難得 得已生放逸

放逸極黑暗 当招地獄苦

——日称等訳『諸法集要経』・卷第二——

人中難得生 得者針投芥

迷惑若散乱 復墮於地獄

——法天訳『妙法聖念処経』・卷第七⁽³⁸⁾

とあるが、梵文『ダルマサムッチアヤ』では、

durlabham mānuṣaṃ janma

ya labdhvā ye pramādināḥ

te pramādatamobhṛantāḥ

patanti narake naraḥ⁽³⁹⁾ (444)

(四四四) 得難い人間の生を得ても、

放逸にして、放逸の黒暗(＝迷妄)に混乱した人々は地獄に墮ちる。)

とある。

(d)是謂、比丘、如来出現世間、甚為難値、人身難得、生正國中、亦復

難遭、与善知識相遇、亦復如是、聞説法言、亦不可遇、法法相生、

時時乃有。

——僧伽提婆訳『增壹阿含経』・卷第四十一⁽⁴⁰⁾——

この『增壹阿含経』の文は、『ダンマパダ』系の「人身得難し」の文と

似ているが、パーリに相應する經典がないので確めることができないので、ここに入れておく。

(e)諸仏難値、八難難離、人身難得、經法難聞、信之亦難。

——鳩摩羅什訳『仏説華手経』・卷第七⁽⁴¹⁾——

この鳩摩羅什訳の『華手経』は、『出三蔵記集』では「華首経 十卷⁽⁴²⁾」として出ているものとされている。これも『ダンマパダ』系の文と似ているが、「八難難離」とあるのが注意を引く。「人身受け難し」の文と「八八難処」の觀念を併せて考慮すべきであろう⁽⁴³⁾。というところが既に指摘されている。

『大集経』には、卷第二十⁽⁴⁴⁾、三十一⁽⁴⁵⁾、三十二⁽⁴⁶⁾、三十四⁽⁴⁷⁾、三十七⁽⁴⁸⁾等に「人身得難し」の文が見出されるが、卷第二十の文を取り出して、紹介しておこう。

(f)無上世尊[※]甚難有 法僧二宝亦復然

人身難得信亦爾 施心福田亦復難

無上世尊難得見 見已聞法亦復難

難得遠離於八難 得如法忍亦復難

其心難得而調伏 修空三昧亦復難

修善思惟如法住 如是二事亦復難
一切煩惱難遠離 獲得菩提亦復難

※甚二世 宋、元、明、宮の各本。

——曇無讖訳『大方等大集經』・卷第二十・「宝幢分」——

ここにも八難を遠離することが「難しい」とある。また、「人身難得亦爾」、「無上世尊難得見」、「見已聞法亦復難」以外の文が増広されている。

『大宝積經』・卷第九⁽⁵⁰⁾、四十二⁽⁵¹⁾、九十六⁽⁵²⁾、一百三⁽⁵³⁾、一百二十七等にも「人身難得」を含む文が見える。その中、卷第一百二十七・「宝髻菩薩會」では、

(g) 諸導師衆難得遇 經典之要甚難值

人身難得及閑暇 篤信禁戒誠亦難

——竺法護訳『大宝積經』・卷第一百二十七・「宝髻菩薩會」——

とあり、また卷第九十六・「勤授長者會」では、

(h) 仏出世難。人身難得。時亦難遇。於仏法中、以信出家、是事亦難。

成比丘性、亦復甚難。如法修行、是亦為難。知恩報恩、少恩不忘、

讚仏乘の人々

是人難得。能於仏法、生信樂心、是人難得。信樂成就、是事復難。
莊嚴仏法、是事亦難。解脫生死、倍復為難。

——菩提流志訳『大宝積經』・卷第九十六・「勤授長者會」——

と、これまた増広されている。

次に、三十卷『仏名經』・卷第二十四では、

(i) 是故經中説。人身難得。仏法難聞。衆僧難値。信心難生。六根難具。善友難得。怖心難發。而今相与宿植善根。得此人身、六根完具。又値善友、得聞正法。⁽⁵⁶⁾

と、「人身難得」などの「難」は、既に經に説かれているところであると述べ、しかるに宿世に善根を植えたが故に、人身を得、六根を完具し、善友に値い、正法を聞くことができたのであるという。

以上の譬喩なしの文の系列に入るのが、既に紹介した、シャーンティデーヴァの『入菩提行』・第四章の十五偈である。

(j) 如来の出世、淨信、人身、善を反覆するに適應する状態——、このよ

うな極めて得難いことを「また」何時^{いつ}「私は」得るのであるうか。

ここでは、「極めて得難い」は atidurlabha であらわされている。

(2) 盲亀浮木の譬喩のある「人身得難し」の文

(a) sara kāṇakacchapaṃ pubbe samudde aparato ca
yugacchiddaṃ |

siraṃ tassa ca paṭimukkaṃ manussalābhaṃhi opamaṃ ||
(500)

—— Therīgāthā, 500. ⁽⁵⁷⁾ ——

(五〇〇 東の海における盲亀が西の方より「流れてくる浮木の」
軀の穴に、その頭を入れるということを思ってください。人身を得
ること〔は難しいということ〕に対する譬喩なのです。)

これは、出家する前の、王女スメーターが両親とアニカラッタ王に対
して語っている言葉であるが、盲亀浮木の譬喩をもって「人身得難し」
ということをあらわすのは、よく世間に知られた譬喩であるように述べ
られている。『テーリー・ガーター』という古い文献にあることが注意
される。

『テーリー・ガーター』は、『テララ・ガーター』と共に、仏弟子た
ちの詩集であるが、經典では、盲亀浮木の譬喩はどのようにあらわされ
ているのであろうか。

(b) Seyyathapi puriso, bhikkhave, ekacchigalaṃ yugaṃ
samudde pakkiṇeṃ, tam enaṃ puratthimo vāto pacchi-
mena saṃhareyya pacchimo vāto puratthimena saṃhareyya
uttaro vāto dakkhiṇena saṃhareyya dakkhiṇo vāto uttarena
saṃhareyya; tat' assa kaṇo kacchapo; so vassasatassa
accayena sakiṃ ummuṇṇeṃ. — Taṃ kim mañātha, bhikk-
have? Api nu so kaṇo kacchapo amukasmīṃ ekacchigale
yuge givaṃ paveseyyāti?

Yadi nūna, bhante, kadaci karahaci dghassa addhuno
accayenāti.

Khippataraṃ kho so, bhikkhave, kaṇo kacchapo amukas-
miṃ ekacchigale yuge givaṃ paveseyya, ato dullabhata-
rāhaṃ, bhikkhave, manussattaṃ vadāmi sakiṃ vimipātāga-
tena bālena.

—— Majjhima-Nikāya. 129. Bālaparādiyasuttaṃ — ⁽⁵⁸⁾

〔比丘たちよ、譬喩は「或る」人が一つの穴のある軀を海に投げ
入れるとする。それを東風が西に運び去る。西風が東に運び去る。
北風が南に運び去る。南風が北に運び去る。そこに、盲亀がいると
する。彼は一百年を過ぎて一度「水底より」浮び上ってくる。比丘
たちよ、これをどう考えるか。かの盲亀はその一つの穴のある軀の

中に首を入れることができるであらうか。」

「尊者よ、もし何時にか〔できるとしても〕、長時を過ぎて〔でありましょう〕。」

「比丘たちよ、かの盲亀がその一つの穴のある軛の中に首を入れることができるのは、寧ろ速い方である。比丘たちよ、一度〔三悪道の〕險難処に越った愚者が、〔再び〕人身を得ることはそれよりもっと難しいことであると私は説く。〕」

比丘、猶如此地滿其中水、有一陸亀、壽命無量百千之歳。彼水上有小輕木板、唯一孔、為風所吹。比丘、於意云何。彼陸亀頭寧得入此小輕木板一孔中耶。比丘答曰、世尊、或可得入。但久久甚難。世尊告曰、比丘、或時陸亀過百年已、從東方來而一挙頭。彼小木板唯有一孔、為東風、吹移至南方。或時陸亀過百年已、從南方來而一挙頭。彼一孔板、為南風、吹移至西方。或時陸亀過百年已、從西方來而一挙頭。彼一孔板、為西風、吹移至北方。或時陸亀、從北方來而一挙頭。彼一孔板、為北風、吹隨至諸方。比丘、於意云何。彼陸亀頭寧得入此一孔板耶。比丘答曰、世尊、或可得入。但久久甚難。比丘、如是、彼愚癡人、從畜生出、還生為人、亦復甚難。

—— 僧伽提婆訳『中阿含經』・卷第五十三・一九九・「大品癡患地經」——

これは、パーリでは、『中部經典』・一二九・「賢愚經」、シナ訳では、『中阿含經』・一九九・「大品癡患地經」の一節であるが、盲亀浮木の譬喩によつて、「一度〔三悪道などの〕險難処に越った愚者が〔再び〕人身を得ることはそれよりもっと難しいこと」が説かれている。この個所については、パーリの『相應部』とシナ訳の『雜阿含經』によく似た文があり、パーリでは、「二經に分れている。

2. Seyyathāpi bhikkhave puriso mahāsamudde ekacchiṅga-
laṃ yugam pakkhipeyya || tatrāpissa kaṇo kacchapo yo
vassasatassa vassasatassa accayena sakim sakim ummuje-
yya ||
3. Taṃ kim mañātha bhikkhave || api nu so kaṇo kaccha-
po vassasatassa vassasatassa accayena sakim sakim ummu-
jianto amusnim ekacchiggaḷe yuge givam paveseyyā
ti ||
- Yadi nūna bhante kadaci karahaci dighassa addhuno
accayena ti ||
4. Khippataram kho so bhikkhave kaṇo kacchapo vassasa-
tassa vassasatassa accayena sakim sakim ummujianto
amusnim ekacchiggaḷe yuge givam paveseyya na tvevā-
ham bhikkhave sakim vinipātātena balena manussattaṃ

vadāmi ||

—Sāmyutta-Nikāya, Sacca-samyuttam LVI, 47. (7)

Chiggala⁽⁶⁰⁾—

(二) 比丘たちよ、譬えは「或る」人が大海に一つの穴のある輓を投げ入れるとする。そこに盲亀がいて、一百年を過ぎるたびに一度づつ、「水底より」浮び上って来る。

三 比丘たちよ、これをどう考えるか。かの盲亀は、一百年を過ぎるたびに一度づつ、「水底より」浮び上って来て、その一つの穴のある輓の中に首を入れることができるであろうか。

尊者よ、もご何時にか「できる」としては、長時を過ぎても「できりませぬ」。

四 比丘たちよ、かの盲亀が一百年を過ぎるたびに一度づつ、「水底より」浮び上って来て、その一つの穴のある輓の中に首を入れることができるのは、寧ろ速い方である。比丘たちよ、しかし一度險難処に趣いた愚者が、人身「を得る」とは「このようにはできぬ」なり。

2. Seyyathāpi bhikkhave ayam mahāpathavi ekodakā assa ||
tatra puriso ekacchiggaḷaṃ yugam pakkhipeyya || tam e-
nam puratthimo vāto pacchimaṃ saṃhareyya || pacchimo
vāto puratthimena saṃhareyya || uttaro vāto dakkhiṇena

saṃhareyya || dakkhiṇo vāto uttarena saṃhareyya || ||
Tatrasa kāṇo kacchapo so vassasatassa vassasatassa acca-
yena sakiṃ sakiṃ ummuḷḷeyya || ||

3. Taṃ kim maññatha bhikkhave api nu so kāṇo kacchapo
vassasatassa vassasatassa accayena sakiṃ sakiṃ ummuḷḷi-
anto amusmim ekacchiggaḷe yuge givam paveseyyā ti || ||

Adhiccam idam bhante yaṃ so kāṇo kacchapo vassasa-
tassa vassasatassa accayena sakiṃ sakiṃ ummuḷḷianto
amusmim ekacchiggaḷe yuge givam paveseyyā ti || ||

4. Evaṃ adhiccam idam bhikkhave yaṃ manussattam
labhati || evaṃ adhiccam idam bhikkhave yaṃ tathāgato
loke uppajjati arahāṃ sammāsambuddho || evaṃ adhiccam
idam bhikkhave yaṃ tathāgatapavedito dhammavinayo
loke dippati || ||

—Sāmyutta-Nikāya, Sacca-samyuttam LVI, 48. (8)
Chiggala⁽⁶¹⁾—

(一) 比丘たちよ、譬えはこの大地が一面の水びあるところ。そこに「ある」人が一つの穴のある輓を投げ入れるところ。それを東風が西に運ぶとき、西風が東に運ぶとき、北風が南に運ぶとき、南風が北に運ぶとき。それに盲亀が上るたびに、彼は一百年を過ぎるたびに一度づつ、「水底から」浮び上って来る。

三 比丘たちよ、これをどう考えるか。かの盲亀は一百年を過ぎるごとに一度づつ、「水底より」浮び上ってきて、その一つの穴のある軛の中に首を入れることができるであらうか。

尊者よ、かの盲亀が一百年を過ぎるごとに一度づつ、「水底より」浮び上ってきて、その一つの穴のある軛の中に首を入れることができるのは、めったにないことである。

四 比丘たちよ、「これと」同じく、人身を得るのは、めったにないことである。比丘たちよ、「これと」同じく、如来・応供・正等覚者が世に出るのは、めったにないことである。比丘たちよ、「これと」同じく、如来の教えられた法と律が世に輝やくのは、めったにないことである。()

後者の経、「相应部」四八・八の方では、盲亀が一百年に一度、浮木の軛の穴の中に首を入れることができることを、*adhicca* という語であらわし、人身を得ること、如来が世に出ること、教えを聞くことの難しいことの譬喩としている。この *adhicca* は、普通、「無因の、無因無縁の、偶然の」という意味の語であるが、ここでは、「めったにない」という言葉で訳してみた。

右のパーリ『相应部』に対応しているシナ訳『雜阿含経』では、次のようになっている。

爾時世尊、告諸比丘、譬如大地、悉成大海、有一盲亀、寿無量劫、百年一出其頭。海中有浮木止、有一孔、漂流海浪、隨風東西。盲亀百年、一出其頭、當得遇此孔不。阿難白仏、不能世尊、所以者何、此盲亀、若至海東、浮木隨風、或至海西。南北四維圍遶亦爾。不必相得。仏告阿難、盲亀浮木、雖復差違、或復相得。愚癡凡夫、漂流五趣、暫復人身、甚難於彼。

——求那跋陀羅訳『雜阿含経』・卷第十五・(四〇六)⁽⁶²⁾——

ここでは、「暫復人身、甚難於彼」と「難」で訳している。そして、「人身得難し」ということよりも、(b)の最初の文と同じく、再び人身を得ることの難しいことを強調している。その思想的背景に、「漂流五趣」とあるように、輪廻生死の思想があつたことであるのは、勿論のことである。

盲亀浮木の譬喩は『ミリンダバンハー』にも用いられている。

(c) *Yam pan' etam mahārāja Bhagavatā kāṇakacchapopamam upadassitam manussattapapilābhāya, tathūpamaṃ mahārāja imesaṃ samāgamaṃ dhārehi.*⁽⁶³⁾

(大王よ、さて、これらの出会いは、人身を得ることについて、世尊によって説示された、かの盲亀〔浮木〕の譬喩の如くであると、

大王よ、理解して下さい。)

これら盲亀浮木の譬喩のある「人身得難し」の文の系列に入るのが、既に紹介した、マートリチェータ『二百五十讚』では、第五偈の、

この私は正法〔を聞く〕大きな喜びを持つ〔ことのできる〕人身を得て、あたかも大海で〔浮木の〕輓の穴に亀が首を入れることが「できた」ようである。

であり、シャーンティデーヴァの『入菩提行』では、第四章の第二十偈の、

この故に世尊は言われた、——人身は極めて得難い。「それは」あたかも大海で〔浮木の〕輓の穴に亀が首を入れることが「できた」ようである〔と〕。)

である。

(3) 優曇花の譬喩のある「人身得難し」の文

三千年に一度、花を開くというウドンバラ (udumbara) 花の譬

喩をもって、人身の得難いことをあらわす文は、次のように見えてゐる。

『増耆阿含経』に、

(a) 諸仏出興難 説法亦復然

人身不可獲 亦如優曇花

——僧伽提婆訳『増耆阿含経』・巻第二十四(六)⁽⁶⁴⁾——

とあり、『悲華経』では、

(b) atha khalu kulaputra brāhmaṇaḥ Samudrarenū rājanam
Araṇeminam etad avocati “durlabham maharāja manusya-
tvam, durlabha kṣaṇasampat, durlabham udumbarapūspa-
sadsānam tathāgatānam arhatāṃ samyaksaṃbuddhanāṃ
prādurbhāvo loke, durlabhah kuśaladharme chandah, dur-
labham samyakprajñadhanam” ||
——Karūṇapūṇḍarīka, III, Dana-visarga-parivarta⁽⁶⁵⁾——

(善男子よ、そのとき、サムドラレーヌ梵志はアラネーシン王に、次のように言った。

「大王よ、人身は得難い。「人間に生れ、法を聞くなどの」機会

に恵まれることは得難い。ウドゥンバラの花の如き如来・応供・正等覚者たちの世に出現することは得難い。善法に対する意志は得難い。正しい誓願は得難い。

善男子、爾時、宝海梵志白転輪王言、大王、当知。人身難得。王、今已得成就無難。諸仏世尊出世甚難、過優曇華。調善欲心、及作善願、乃復甚難。

——曇無讖訳『悲華経』・巻第二・「大施品」——⁽⁶⁶⁾

善男子、爾時、国大師、海済婆羅門語離淨王、作如是言、大王、人身難得、閑静時難、如来・応供・正遍知出世甚難。譬如優曇鉢華時一現耳。樂求善根難、正願亦難。

——失訳『大乘悲分陀利経』・巻第二・「動発品」——⁽⁶⁷⁾

とある。この『悲華経』梵文にあらわされているように、ウドゥンバラ花の譬喩は、如来が世に出現することの得難さによく用いられるものであって、それが(a)の『増耆阿含経』の例に見られるように、人身の得難きことなどにも適用されるにいたったものであろう。もう二例をあげておこう。大乘の『涅槃経』には、

(c) 仏興難値、人身難得、得信亦難。離八難処及持戒具足、此復益難。

讚仏乘の人々

猶恒沙求金粟。亦如優曇華。

※恒沙中 宋、元、明、宮の各本。

——法顕訳『大般泥洹経』・巻第二・「哀歎品」——⁽⁶⁸⁾

仏出世難、人身難得、値仏生信、是事亦難。能忍難忍、是亦復難。成就禁戒、具足無欠、得阿羅漢果、是事亦難。如求金沙・優曇鉢花。汝諸比丘、離於八難、得人身難。

——曇無讖訳『大般涅槃経』・巻第二・「壽命品」——⁽⁶⁹⁾

とあり、『聖善住意天子所問経』には、

(d) 仏出世難、人身難得、如優曇華。出時甚難如是。如来・応・正遍知、亦復如是。出世甚難、人身難得。

——毘目智仙・般若流支共訳『聖善住意天子所問経』・巻上——⁽⁷⁰⁾

と見えている。

(4) 盲亀浮木と優曇花の二つの譬喩のある「人身得難し」の文

先づ、『阿難同学経』には、

(a) 比丘、人身難得、猶優曇鉢花。比丘、人身甚難得、猶彼板一孔推著水中、數万歳乃值其孔。比丘、時亦難遇。

——安世高訳『阿難同学経』⁽⁷⁾——

『歴代三宝紀』以後の経録は、この経を安世高訳としているが、現存最古の経録である『出三蔵記集』には、安世高の項に『阿難同学経』は載せていない。安世高訳というのは疑わしいが、「彼板一孔」が恐らく盲亀浮木の譬喩を意味しているのであると思われるので、二つの譬喩をもって「人身得難し」の文をあらわしている。

また、大乘經典では、『大般涅槃經』に、

(b) 人身難得、如優曇花、我今已得。如来難値、過優曇花、我今已値。

清浄法華難得見聞、我今已聞。猶如盲亀值浮木孔。

——曇無讖訳『大般涅槃經』・卷第二十三・「光明遍照高貴徳王菩薩品」⁽⁸⁾——

とある。「人身難得」の文は、ウッドゥンバラ花によってあらわされ、「清浄法華難得見聞」の文が盲亀浮木によってあらわされているのであるが、一つづきの文の中に二つの譬喩が用いられているので、ここに入れておく。

以上のような「人身難得し」の文が經典中に見出されるのであるが、見落としているものもまだあると思われる。

「人身得難し」⁽⁹⁾についての、仏教以外の文献については既に言及されているので、それを参照せられることを願う。

註

- (26) Suriyagoda Sumangala Thera: The Dhammapada (P.T.S.), p. 27.
- (27) John Brough: The Gāndhāri Dharmapada, p. 160.
- (28) N. S. Shukla: The Buddhist Hybrid Sanskrit Dharmapada, p. 35.
- (29) 維祇難等訳『法句経』(『大正蔵』四卷、五六七頁、上段)、法炬・法立共訳『法句譬喩経』卷三(『大正蔵』四卷、五九四頁、下段)。
- (30) 中村 元「原始仏教の思想」上(『中村元選集』第十三卷)八九頁。同「仏教における人間観の特徴」(『日本仏教学会年報』第三十三号、二十四頁)。
- (31) 『大正蔵』一卷、八一七頁、上段。
- (32) 『大正蔵』五十五卷、三〇頁、下段。
- (33) 『大正蔵』二卷、一六四頁、上段。
- (34) 『大正蔵』五十卷、一〇二頁、中段。
- (35) P. L. Vaidya: Divyāvadāna. (Buddhist Sanskrit Texts—No. 20), Darbhanga, 1959, p. 237. 定方晟『アッシェーカ王伝』三三三頁。
- (36) 『大正蔵』十七卷、一八七頁、下段。
- (37) 『大正蔵』十七卷、四六八頁、中段。
- (38) 『大正蔵』十七卷、四四一頁、上段。

- (39) Lin Li-Kouang: *Dharma-Samuccaya, Compendium de la Loi*, 2^e partie, Paris, 1969, p. 36.
- (40) 『大正蔵』二卷、七六七頁、上段。
- (41) 『大正蔵』十六卷、一七七頁、下段。
- (42) 『大正蔵』五十五卷、一〇頁、下段。
- (43) 中村元「仏教における人間観の特徴」〔日本仏教学会年報〕第三十三号、二四頁。
- (44) 『大正蔵』十三卷、一四一頁、下段。
- (45) 『大正蔵』十三卷、二一四頁、下段。
- (46) 『大正蔵』十三卷、二二二頁、中段。
- (47) 『大正蔵』十三卷、二三五頁、中段。
- (48) 『大正蔵』十三卷、二五〇頁、上段。
- (49) 『大正蔵』十三卷、一四一頁、下段。
- (50) 『大正蔵』十一卷、五〇頁、中段。
- (51) 『大正蔵』十一卷、二四五頁、中一ノ下段。
- (52) 『大正蔵』十一卷、五四〇頁、中段。
- (53) 『大正蔵』十一卷、五七八頁、中段。
- (54) 『大正蔵』十一卷、六五七頁、下段。
- (55) 『大正蔵』十一卷、五四〇頁、中段。
- (56) 『大正蔵』十四卷、二八一頁、中段。
- (57) H. Oldenberg and R. Pischel: *Thera-and Theri-Gāthā*. (PTS.), p. 172.
- (58) R. Chalmers: *Majjhima-Nikāya*, vol. III. (PTS.), p. 169.
- (59) 『大正蔵』一卷、七六一頁、中一ノ下段。
- (60) M. Leon Feer: *Samyutta-Nikāya*, Part V. (PTS.), pp. 455-456.
- (61) *Ibid.* pp. 456-457.

- (62) 『大正蔵』二卷、一〇八頁、下段。
- (63) V. Trenckner: *The Milindapañho*. (PTS.), p. 204.
- (64) 『大正蔵』二卷、六七八頁、中段。
- (65) Isshi Yamada: *Karunāpūdarīka*, vol II, p. 75.
- (66) 『大正蔵』三卷、一七八頁、上段。
- (67) 『大正蔵』三卷、二四五頁、中段。
- (68) 『大正蔵』十二卷、八六一、下段。
- (69) 『大正蔵』十二卷、三七六、中段。
- (70) 『大正蔵』十二卷、一一六、上段。
- (71) 『大正蔵』二卷、八七四頁、下段。
- (72) 『大正蔵』十二卷、四九八頁、下段。
- (73) 中村元「原始仏教の思想」上〔中村元選集〕第十三卷、八九—九〇頁。

おわりに

以上、見てきたように、インドの仏教詩人と日本の妙好人は、自力の信心（自力の菩提心）と他力の信心（他力の菩提心）の違いはあっても、法をどこまでも讃歎していくと共に、自分が罪惡の身であることをどこまでも悲歎していくことにおける信心では一つであると言えるであろう。それは、信心は「澄淨の義」とあらわされている如く、淨められた心であり、透明な心であるから、法とわが身が同時に見えてくるのである。

また、法をどこまでも讃歎していくことが、『無量寿経』であらわされている「諸仏の称名」の意であり、罪悪の自身をどこまでも悲歎していくということが「衆生の聞名」の意である。

このような信にめざめることができたのは、得難き人身を得ることができたからであると「人身得難し」の教説を受けて、謝念をあらわしていくこともインドの仏教詩人と日本の妙好人は共通している。

〔本稿は昭和五十五年度・文部省科学研究費助成による研究成果の一部である。〕